



白 しろ

芥川 あくたがわ

龍之介 りゅうのすけ



(注1) 間は長さの単位。一間は約一・八二メートル。七、八間は約一三〇一五メートル。  
(注2) えり、肩、背などに文様を染め抜いた着物。

一

ある春のひる過ぎです。白という犬は土をかぎ静かな往来を歩いていました。  
せまい往来の両側にはずっと芽をふいた生垣が続き、そのまた生垣の間にはち  
らほら桜などもさいています。白は生垣に沿いながら、ふとある横町へ曲りま  
した。が、そちらへ曲ったと思うと、さもびっくりしたように、突然立ちどまっ  
てしまいました。

それもむりはありません。その横町の七、八間先には印半纏を着た犬殺しが  
ひとり、わなをうしろにかくしたまま、一ぴきの黒犬をねらっているのです。し  
かも黒犬はなにも知らずに、この犬殺しの投げてくれたパンかなにかを食べてい

るのです。けれども白がおどろいたのはそのせいばかりではありません。見知らぬ犬ならばともかくも、今犬殺しにねらわれているのはおとなりの飼犬の黒なのです。毎朝顔を合せるたびにおたがいの鼻のにおいをかぎあう、大の仲よしの黒なのです。

白は思わず大声に「黒君！ あぶない！」とさげぼうとしました。が、そのひょうしに犬殺しはじろりと白へ目をやりました。「教えて見ろ！ きさまから先へわなにかけるぞ。」——犬殺しの目にはありありとそういうおどかしが浮かんでいます。白はあまりの恐ろしさに、思わず吠えるのをわすれました。いや、わすれたばかりではありません。いつこくもじつとしてはいられぬほど、おくびよう風が立ちだしたのです。白は犬殺しに目をくばりながら、じりじりあとすざりをはじめました。そうしてまた生垣のかげに犬殺しの姿がかくれるが早いか、

(注3) 人や車が通らないように張った縄。(注4) 生ゴミなどを捨てるために外に置いていた箱。  
(注5) ハエやハチに似た昆虫。人や馬、牛などを刺す。

かわいそうな黒を残したまま、いちもくさんに逃げ出しました。

そのとたんにわなが飛んだのでしよう。つづけさまにけたたましい黒の鳴き声が聞えました。しかし白は引き返すどころか、足をとめるけしきもありません。ぬかるみを飛び越え、石ころをけちらし、往來どめの縄をすりぬけ、ごみための箱をひっくりかえし、ふりむきもせずに逃げ続けました。ごらんなきい、坂をかけおりのを！ そら、自動車にひかれそうになりました！ 白はもう命の助かりたさに夢中になっているのかも知れません。いや、白の耳の底にはいまだに黒の鳴き声があぶのようになっっているのです。

「きやあん。きやあん。助けてくれえ！ きやあん。きやあん。きやあん。助けてくれえ！」

白しろはやつとあえぎあえぎ、主人しゅじんの家いえへ帰かえつて来きました。黒堀くろべいの下したの犬いぬくぐりをぬけ、物置ものおき小屋こやをまわりさえすれば、犬小屋いぬこやのある裏庭うらにわです。白しろはほとんど風かぜのように、裏庭うらにわの芝生しばふへかけこみました。もうこのところまで逃にげてくれば、わなにかかる心配しんぱいはありません。おまけに青あおあおした芝生しばふには、さいわいお嬢じょうさんや坊ぼっちゃんもボール投なげをしてあそんでいます。それを見た白しろのうれしさはなんといえがいいのでしょうか？ 白しろはしつぽをふりながら、一足いっそくと飛びにそこへ飛とんでいきました。

「お嬢じょうさん！ 坊ぼっちゃん！ 今日きょうは犬殺いぬころしにあいましたよ。」

白しろはふたりを見上みあげると、息いきもつかずにこういいました。（もつともお嬢じょうさん

や坊ちゃんには犬の言葉はわかりませんから、わんわんと聞えるだけなのです。しかし今日はどうしたのか、お嬢さんも坊ちゃんもただあつけにとられたように、頭さえなでてはくれません。白は不思議に思いながらも、もう一度ふたりに話しかけました。

「お嬢さん！ あなたは犬殺しをござんじですか？ それは恐ろしいやつですよ。坊ちゃん！ わたしは助かりましたが、お隣の黒君はつかまりましたぜ。」  
それでもお嬢さんや坊ちゃんは顔を見あわせているばかりです。おまけに二人はしばらくすると、こんなみょうなことさえいいますのです。

「どこの犬でしょう？ 春夫さん。」

「どこの犬だろう？ 姉さん。」

どこの犬？ 今度は白の方があつけにとられました。（白にはお嬢さんや坊ちゃん

やんの言葉もちやんと聞きわけることができのす。われわれは犬の言葉がわからないものすから、犬もやはりわれわれの言葉はわからないように考えていますが、実際はそうではありません。犬が芸をおぼえるのはわれわれの言葉がわかるからす。しかしわれわれは犬の言葉を聞きわけることができませんから、闇の中を見通すことだの、かすかなにおいをかぎ当てることだの、犬の教える芸は一つもおぼえることができません。

「どこの犬とはどうしたのです？ わたしですよ！ 白ですよ！」

けれどもお嬢さんはあいかわらず気味悪そうに白をながめています。

「おとなりの黒の兄弟かしら？」

「黒の兄弟かも知れないね。」坊ちゃんもバットをおもちやにしながら考え深そうに答えました。「こいつもからだじゅうまっ黒だから。」

(注6) 町は長さの単位。一町は約一〇九メートル。一町は六〇間。

白は急に背中の毛が逆立つように感じました。まつ黒！ そんなはずはありません。白はまだ子犬の時から、牛乳のように白かったのですから。しかし今前足を見ると、——いや、前足ばかりではありません。胸も、腹も、後足も、すらりと上品にのびたしっぽも、みんななべ底のようにまつ黒なのです。まつ黒！ まつ黒！ 白は気でも違ったように、飛び上ったり、はねまわったりしながら、一所懸命にほえたてました。

「あら、どうしましょう？ 春夫さん。この犬はきつと狂犬だわよ。」

お嬢さんはそこに立ちすくんだなり、今にも泣きそうな声を出しました。しかし坊ちゃんも勇敢です。白はたちまち左の肩をばかりとバットにうたれました。と思うと二度目のバットも頭の上へ飛んできます。白はその下をくぐるが早いか、もときた方へ逃げだしました。けれども今度はさっきのように、一町も



二町も逃げだしはしません。芝生のはずれにはしゅろの木のかげに、クリーム色にぬった犬小屋があります。白は犬小屋の前へ来ると、小さい主人たちをふり返りました。

「お嬢さん！ 坊ちゃん！ わたしはあの白なのですよ、いくらまっ黒になつていても、やっぱりあの白なのですよ。」

白の声はなんともいわれぬ悲しさと怒りとにふるえていました。けれどもお嬢さんと坊ちゃんにはそういう白の心もちものみこめるはずはありません。げんにお嬢さんにはくらしそうに、「まだあすこにほえているわ。ほんとうにずうずうしいのら犬ね。」などと、地だんだをふんでいるのです。坊ちゃんも、——坊ちゃんは小径のじやりをひろうと、力いっぱい白へ投げつけました。

「ちくしよう！ まだぐずぐずしているな。これでもか？ これでもか？」

じやりは続けさまに飛んできました。中には白の耳のつけ根へ、血のにじむくらい当ったのもあります。白はとうとうしっぽを巻き、黒塀の外へぬけ出しました。黒塀の外には春の日の光に銀の粉をあびたもんしろちようが一羽気楽そうにひらひら飛んでいます。

「ああ、きょうから宿無し犬になるのか？」

白はため息をもらしたまま、しばらくはただ電柱の下にぼんやり空をながめていました。

## 三

お嬢さんや坊ちゃんに追いだされた白は東京中をうろろうろ歩きました。しか

しどこへどうしても、わすれることのできないのはまつ黒くろになった姿すがたのことで  
す。白しろは客きやくの顔かおをうつしている理髪店りはつてんの鏡かがみを恐おそれました。雨上りあめあがの空そらをうつし  
ている往来おうらいの水たまりみずを恐おそれました。往来おうらいの若葉わかばをうつしている飾窓かざりまどのガラス  
を恐おそれました。いや、カフェのテーブルに黒ビールくろをたたえているコップさえ、  
——けれどもそれがなになりましょう？ ああの自動車じどうしゃをごらんなさい。ええ、  
ああの公園こうえんの外そとにとまった、大おおきい黒ぬりくろの自動車じどうしゃです。うるしを光ひからせた自動車じどうしゃ  
の車体しやたいは今いまこちらへ歩いてくる白しろの姿すがたをうつしました。——はつきりと、鏡かがみの  
ように。白しろの姿すがたをうつすものはああの客待きやくまちの自動車じどうしゃのように、いたるところにあ  
るわけなのです。もしあれを見みたとすれば、どんなに白しろは恐おそれるでしょう。そら、  
白しろの顔かおをごらんなさい。白しろは苦くるしそうになつたと思おもうと、たちまち公園こうえんの中なかへか  
けこみました。

公園こうえんの中なかにはすずかけの若葉わかばにかすかな風かぜがわたっています。白しろは頭あたまをたれたなり、木々きぎの間あいだを歩いていきました。ここにはさいわい池いけのほかには、姿すがたをうつすものも見当りません。物音ものおとはただ白しろばらにむらがる蜂はちの声こえが聞えるばかりです。白しろは平和へいわな公園こうえんの空気くうきに、しばらくはみにくい黒犬くろいぬになつた日ひごろの悲かなしさもわすれていました。

しかしそういう幸福こうふくさえ五分ごぶんと続つづいたかどうかわかりません。白しろはただ夢ゆめのように、ベンチのならんでいるみちばたへでました。するとそのみちの曲まがり角かどの向むこうにけたたましい犬いぬの声こえが起おこつたのです。

「きやん。きやん。助たすけてくれえ！ きやあん！ きやあん。助たすけてくれえ！」  
白しろは思おもわず身みぶるいをしました。この声こえは白しろの心こころの中なかへ、あの恐おそろしい黒くろの最さい期じをもう一度いちどはつきり浮うかばせたのです。白しろは目めをつぶつたまま、もときたほう

へ逃げだそうとしました。けれどもそれは言葉通り、ほんのいつしゆんの間の  
ことばとお  
ことです。白はすさまじいなり声をもらすと、きりりとまたふり返りました。  
しろ  
かえ  
「きやあん。きやあん。助けてくれえ！ きやあん。きやあん。助けてくれえ！」  
たす  
この声はまた白の耳にはこういう言葉にも聞えるのです。  
こえ  
しろ  
みみ  
ことば  
きこ

「きやあん。きやあん。おくびようものになるな！ きやあん。おくびようもの  
になるな！」

白は頭を低めるが早いか、声のする方へかけだしました。  
しろ  
あたま  
ひく  
はや  
こえ  
ほう

けれどもそこへ来て見ると、白の目のまえへ現れたのは犬殺しなどではあり  
けれどもそこへ来て見ると、白の目のまえへ現れたのは犬殺しなどではあり  
あらわ  
いぬごろ  
ません。ただ学校の帰りらしい、洋服を着た子どもが二三人、くびのまわりへ縄  
がっこう  
かえ  
ようふく  
こ  
にん  
なわ  
をつけた茶色の子犬をひきずりながら、なにかわいわいさわいでのです。子  
ちやいろ  
こいぬ  
をひきずりながら、なにかわいわいさわいでのです。子  
こ  
犬は一所懸命にひきずられまいともがきもがき、「助けてくれえ。」とくり返して  
いぬ  
いっしょうけんめい  
たす  
かえ

(注7) びっくりして、うろたえること。

いました。しかし子どもたちはそんな声に耳をかすけしきもありません。ただわらったり、どなったり、あるいはまた子犬の腹をくつでけったりするばかりです。

白は少しもためらわずに、子どもたちを目がけて吠えかかりました。ふいをうたれた子どもたちはおどろいたのおどろかないのではありません。また実際白のようにすは火のように燃えた眼の色といい、刃物のようにむきだしたきばの列といい、今にもかみつুকかと思いうくらい恐ろしいけんまくを見せているのです。子どもたちは四方へ逃げ散りました。中にはあまりろうばいしたはずみに、みちばたの花だんへ飛びこんだのもあります。白は二三間追いかけたのち、くるりと子犬をふり返ると、しかるようこう声をかけました。

「さあ、おれといっしょに來い。お前の家まで送ってやるから。」

白はもときた木々の間へ、まっしぐらにまたかけこみました。茶色の子犬も嬉

しそうに、ベンチをくぐり、ばらをけちらし、白しろに負まけまいと走はしつて来きます。ま  
だ首くびにぶら下さがつた、長ながい繩なわをひきずりながら。

× × × × × × × ×

二三時間じかんたったのち、白しろは貧まずしいカフェのまえ前に茶色ちやいろの子犬こいぬとたたずんでいまし  
た。昼ひるもうす暗ぐらいカフェの中なかにはもう赤あかあかと電燈でんとうがともし、音おとのかすれた蓄音ちくおん  
機きは浪な花な節ぶしか何なにかやっているようです。子犬こいぬはとくいそうに尾おを振ふりながら、こ  
う白しろへ話はなしかけました。

「僕ぼくはここに住すんでいるのです。この大正軒たいしょうけんというカフェの中なかに。——おじさ  
んはどこに住すんでいるのです？」

「おじさんかい？ ——おじさんはずっと遠とおい町まちにいる。」

白しろは寂さびしそうにため息いきをしました。

(注8) レコードをきくための機械きかい。

(注9) 三味線しゃみせんを伴奏ばんそうに物語ものがたりをかたったり、うなったりする芸能げいのう。

「じゃもうおじさんは家へ帰ろう。」

「まあお待ちなさい。おじさんの御主人はやかましいのですか？」

「御主人？　なぜまたそんなことをたずねるのだい？」

「もし御主人がやかましくなければ、今夜はここにとまっていてください。それから僕のお母さんにも命びろいのお礼をいわせてください。ぼくの家には牛乳だのカレーライスだの、ビフテキだの、いろいろなごちそうがあるのです。」

「ありがとう。ありがとう。だがおじさんは用があるから、ごちそうになるのはこの次にしよう。——じゃお前のお母さんによるしく。」

白はちよいと空を見てから、静かに敷石の上を歩き出しました。空にはカフエの屋根のほすれに、三日月もそろそろ光り出しています。



「おじさん。おじさん。おじさんといえば！」

子犬こいぬは悲かなしそうに鼻はなを鳴なりました。

「じゃ名前なまえだけ聞きかして下ください。僕ぼくの名前なまえはナポレオンなんです。ナポちやんだのナポ公こうだのともいわれますけれども。——おじさんの名前なまえはなんといいですか？」

「おじさんの名前なまえは白しろというのだよ。」

「白しろ——ですか？ 白しろというのは不思議ふしぎですね。おじさんはどこも黒くろいじやありませんか？」

白しろは胸むねがいつぱいになりました。

「それでも白しろというのだよ。」

「じゃ白しろのおじさんといいましたよ。白しろのおじさん。ぜひまた近ちかいうちに一度いちどき

(注 10) 映画のこと。

てください。」

「じやナポ公、さよなら！」

「ごきげんよう、白のおじさん！ さようなら、さようなら！」

#### 四

そののちの白はどうなったか？ ——それはいちいち話さずとも、いろいろの新聞に伝えられています。おおかたどなたもごぞんじでしょう。たびたびあやうい人命を救った、いさましい一匹きの黒犬のあるのを。また一時『義犬』という活動写真の流行したことを。あの黒犬こそ白だったのです。しかしまだ不幸にもごぞんじのないかたがあれば、どうか下に引用した新聞の記事を読んで下さい。

とうきょうにちにしんぶん  
**東京日日新聞**。

さく ちち がつ ごぜん じ ぶん おううせんのは きゆうこうれつしゃ た  
昨十八日(五月)午前八時四十分、奥羽線上り急行列車が田

ばたえきふきん ふみきり つうか ふみきりばんにん かしつ たばたひやくにじゅうさんかいしやいたん  
端駅付近の踏切を通過するさい、踏切番人の過失により、田端一二三会社社員

しばやまでつたろう ちようなんざねひこ さい れつしゃ とお せんろない た い (注11)し  
柴山鉄太郎の長男実彦(四歳)が列車の通る線路内に立ち入り、あやうくれき死

をとげようとしたり。そのときたくましい黒犬が一ぴき、いなずまのように踏切へ  
ふみきり

と もくぜん せま れつしゃ しやりん さねひこ すく だ ゆうかん  
飛びこみ、目前に迫った列車の車輪から、みごとに実彦を救い出した。この勇敢

なる黒犬は人々のたちさわいでいる間にどこかへ姿をかくしたため表彰した  
くろいぬ ひとびと あいだ すがた ひようしよう

いにもすることができず、当局は大いに困っている。  
とうきょうく おお こま

とうきょうあさひしんぶん  
**東京朝日新聞**。

かるいざわ ひしよ ふごう  
軽井沢に避暑ちゆうのアメリカ富豪エドワード・バークレ

し ふじん さん ねこ (注12) さいきんどうし べつそう しやくあま  
一氏の夫人はペルシア産の猫を寵愛している。すると最近同氏の別荘へ七尺余

りの大蛇があらわれ、ベランダにいる猫をのもうとした。そこへ見なれぬ黒犬が  
だいじや ねこ くろいぬ

一ぴき、突然猫を救いにかけてつけ、二十分にわたる奮闘ののち、とうとうその大蛇  
とつぜんねこ すく ぶん ふんどう だいじや

(注 11) 車輪にひかれて死ぬこと。

(注 12) 特別に愛すること。

(注 13) 過ぎた日。先日。

(注 14) 神さまが守ってくれること。

をかみ殺した。しかしこのけなげな犬はどこかへ姿をかくしたため夫人は五  
ドルの賞金をかけ、犬の行方を求めている。

**国民新聞。** 日本アルプス横断ちゆう、一時行方不明になった第一高等学校の

生徒三名は七日(八月)上高地の温泉へ着した。一行は穂高山と槍ヶ岳との間  
に道をうしない、かつ過日の暴風雨にテント糧食等をうばわれたため、ほとん

ど死をかくごしていた。しかるにどこからか黒犬が一ぴき、一行のさまよつてい

た溪谷にあらわれ、あたかも案内をするように、先へ立つて歩きだした。一行は

この犬のあとにしたがい、一日あまり歩いたのち、やっと上高地へ着すること

ができた。しかし犬は目の下に温泉宿の屋根が見えると、一声うれしそうに吠え

たきり、もう一度もときたぐましさの中へ姿をかくしてしまつたという。一行は

みなこの犬の来たのは神明の加護だと信じている。

時事新報。

十三日

(九月)名古屋市の大火は焼死者十余名におよんだが、横関

なごやしちよう

名古屋市長なども愛児をうしなおうとしたひとりである。

令息武矩(三歳)にい

かなる家族の手落からか、猛火の中の二階にのこされ、すでに灰燼となろうとし

たところを、一ぴきの黒犬のためにくわえだされた。

市長は今後名古屋市にかぎ

り、野犬撲殺を禁ずるといつている。

読売新聞。

小田原町城内公園に連日の人気を集めていた宮城巡回動物園の

シベリア産大おおかみは二十五日(十月)午後二時ごろ、突然がんにしようなお

を破り、木戸番二名を負傷させたのち、箱根方面へ逸走した。

小田原署はそのた

めに非常動員をおこない、全町にわたる警戒線をした。すると午後四時半ご

ろ右のおおかみは十字町にあらわれ、一ぴきの黒犬とかみあいをはじめた。

黒犬

は悪戦すこぶる努め、ついに敵をかみふせるにいたった。そこへ警戒ちゆうの

(注 15) 他人の息子のていねいな言い方。

(注 16) 灰と塵。

(注 17) それで走ること。

21

(注 18) 荒々しく強いこと。

巡查もかけつけ、ただちにおおかみを銃殺した。このおおかみはルプス・ジガ  
ンテイクスと称し、もつとも凶猛な種属であるという。なお宮城動物園主はお  
おかみの銃殺を不当とし、小田原署長を相手どつた告訴を起すといきまいてい  
る。等、等、等。

## 五

ある秋の真夜中です。からだも心もつかれ切つた白は主人の家へ帰つてきま  
した。もちろんお嬢さんや坊ちゃんはどうに床へはいつています。いや、今は  
だれひとり起きているものもありますまい。ひっそりした裏庭の芝生の上にも、  
ただ高いしゅろの木のごずえに白い月が一輪浮んでいただけです。白はむかしの

犬小屋のまえに、露にぬれたからだをやすめました。それからさびしい月を相手に、こういうひとりごとをはじめました。

「お月様！ お月様！ わたしは黒君を見殺しにしました。わたしのからだのまっ黒になったのも、おおかたそのせいかと思つています。しかしわたしはお嬢さんや坊ちゃんにお別れもうしてから、あらゆる危険と戦つて来ました。それは一つには何かのひょうしにすすよりも黒いからだを見ると、おくびようを恥じる気が起つたからです。けれどもしまいには黒いのがいやさに、——この黒いわたしを殺したさに、あるいは火の中へ飛びこんだり、あるいはまたおおかみと戦つたりしましたが、不思議にもわたしの命はどんな強敵にもうばわれませんでした。死もわたしの顔を見ると、どこかへ逃げさつてしまうのです。わたしはどうとう苦しきのあまり、自殺をしようと決心しました。ただ自殺をするにつけても、





白しろは小さい主人しゅじんの声こゑにはっと目をひらきました。見ればお嬢さんじょうさんや坊ちゃんぼっちゃんは犬小屋いぬごやの前まえにたたずんだまま、不思議ふしぎそうに顔かおを見合せています。白しろは一度あげた目めをまた芝生しばふの上うえへふせてしまいました。お嬢さんじょうさんや坊ちゃんぼっちゃんは白しろがまっ黒くろに変わった時ときにも、やはり今いまのようにおどろいたものです。あの時ときの悲かなしさを考かんがえると、——白しろは今いまでは帰かえってきたことを後悔こうかいする気きさえ起おこしました。するとそのとたんです。坊ちゃんぼっちゃんは突然とつぜん飛び上あがると、大声おおこゑにこうさげびました。

「お父さんとうさん！ お母さんかあさん！ 白しろがまた帰かえってきましたよ！」

白しろが！ 白しろは思おもわず飛び起おきました。すると逃にげるとでも思おもったのでしよう。お嬢さんじょうさんは両手りょうてをのびしながら、しっかりと白しろの首くびをおさえました。同時に白しろはお嬢さんじょうさんの目めへ、じっと彼かれの目めを移うつしました。お嬢さんじょうさんの目めには黒くろい瞳ひとみにありありと犬小屋いぬごやがうつっています。高たかいしゆるの木きのかけになったクリーム色いろの犬いぬ

(注 19) うっとりすること。

小屋が、——そんなことはとうぜんにちがいません。しかしその犬小屋の前には米粒ほどの小ささに、白い犬が一匹すわっているのです。清らかに、ほっそりと。——白はただ恍惚とこの犬の姿に見入りました。

「あら、白は泣いているわよ。」

お嬢さんは白を抱きしめたまま坊ちゃんの顔を見上げました。坊ちゃんは——ごらんなさい、坊ちゃんのいばっているのを！

「へっ、姉さんだって泣いているくせに！」

このお話は、はじめは大正十二年(一九二三年)八月に「女性改造」という雑誌で発表されました。